

令和5年度 学力向上重点指定校報告書 八幡小学校

1 学校の課題

全国学力・学習状況調査（第6学年対象）

	算数			
	平均正答率		正答率30%未満 児童の割合	
	国	自校	国	自校
R3	70.2	62.0	4.8	5.0
R4	63.2	56.0	8.9	17.0
R5	62.5	52.0	9.8	22.0

令和5年度標準学力調査（第3学年対象）

	算数		
	平均正答率		正答率30%未満 児童の割合
	目標値	自校	自校
3年	73.9	69.9	6.8

上記のように、第6学年を対象に実施した全国学力・学習状況調査及び第3学年を対象に実施した標準学力調査によると、算数科における本校の平均正答率は、全国平均や目標値と比較すると大きく下回っており、正答率30%未満の児童の割合が高い。それが、今年度も継続している。

全校児童を対象とした児童質問紙調査【令和4年度12月】

質問項目	肯定的回答 (%)						
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全体
算数の勉強は好きですか。	78	60	93	56	48	61	66.0
算数の授業の内容はよく分かりますか。	91	73	92	70	67	83	79.3

また、昨年度、全校児童を対象とした児童質問紙調査の結果から、「算数の勉強が好き」「算数の授業がわかる」と回答した児童の割合について、一定の成果は見られたものの、学年差が見られることがわかった。

教員を対象に実施した質問紙調査【令和4年度12月】

質問項目	肯定的回答 (%)
今年度、研究指定を受けたことで、校内の研究推進が図られたと思いますか。	100
今年度、研究指定を受けたことで、自分の授業改善が図られましたか。	71.4

さらに、本校は、令和2年度から、新型コロナウイルス感染症対策や生徒指導上の理由で、校内の研究授業等を実施しておらず、校内の研究体制を構築することが課題であったが、昨年度個別最適な学び重点指定校を受けて取り組んできた結果、教員の授業改善へ向けての意識は向上してきた。しかし、授業を公開する学年としない学年での意識の差が大きく、自分の授業改善が図られたと回答した教員の割合は70%程度に留まった。

以上のことから、本校は引き続き、次の3点が課題である。

1. 学力が定着していないこと
2. すべての児童が授業をわかると感じていないこと
3. すべての教員の授業改善が図られなかったこと

2 研究主題

一人一人が学ぶ喜びをもつ授業づくり

～みんなが「わかった!」「できた!」「もっとやりたい!」を実感できる授業～

3 取組内容

1 授業づくりについて

- (1) 1時間のねらいを明確にした単元の指導計画
- 単元を指導する前は、教科書の『算数の目』の問題が解けるようになるには、どんな力が必要か」というゴールから考えて単元計画を立て、「この1時間は知識を習得させる時間」「技能を習得させる時間」など、1時間のねらいを明確にし、基礎学力の確実な定着を目指した。
 - 教科書の『算数の目』や適用問題に、全国学力・学習状況調査で過去出題されている問題と同じような問題があった場合は、そちらに差し替えて単元計画に入れることで、児童の誤答分析ができるようにした。
 - すべての学年で単元計画を子ども達にも示し、見通しをもって学習できるようにした。

たしざんマスターへのみち

1	どんぐりはあわせてなんこ?	㊦
2	9+4のけいさんのしかた	㊦
3	8+3のけいさんのしかた	㊦
4	めざせ! たしざんマスター①	
5	たまごをあわせてなんこ?	
6	めざせ! たしざんマスター②	
7	たしかめよう	
8	カードをつかって	
9	テスト	
テストおしえて、つぎのマスターへ!!		

第1学年 単元計画

2 つくった公式に注目し、図形の面積を決める長さについて考える

はるとさんは、「右の㊦、㊧の三角形の面積は等しい」といっています。その理由を、はるとさんに一緒に説明しましょう。

「三角形の面積 = 底辺 × 高さ ÷ 2」
形はちがうけど、底辺の長さも高さも……

第5学年 教科書の『算数の目』

(4) えいたさんたちは、テープを直線で切って、下のような㊨と㊩の2つの三角形をつくります。

上の㊨と㊩の三角形の面積について、どのようなことがわかりますか。下の1から4までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。また、その番号を選んだだけを、言葉や数を使って書きましょう。

令和5年度 全国学力・学習状況調査

(2) 学習環境（授業スタイル）づくり

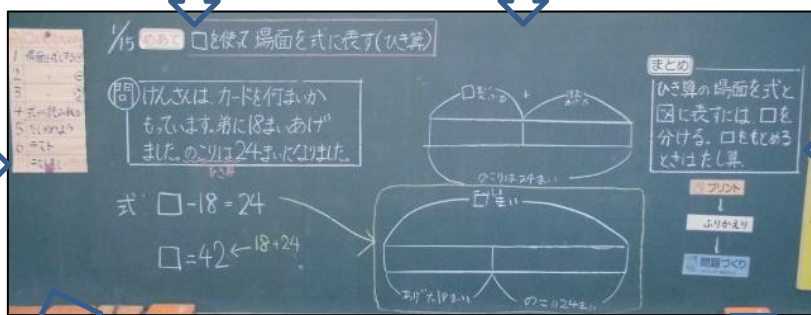
以下のように、1時間の授業の流れを明確にし、児童が安心して授業に参加できるようにした。また、友達の意見を聞くだけの児童や、黒板に書かれた意見をノートに書き写すだけの児童を減らし、児童が自分の学習進度や学習状況に応じて、自分の力で学べるよう工夫した。

単元の見通しをもとう	単元計画を示し、学習の見通しをもたせるとともに、問題を提示する前に課題を予想させる場を設定した。
めあてをつくらう	問題を提示した後、課題意識をもたせた上で、子どもたちのつぶやき等を拾いながら、児童と一緒に、めあてを考えるようにした。 ※ A児がつぶやいた言葉があれば、積極的に取り上げた。
考えよう	自力解決の場面においては、一人で考えることができる場、タブレットや教具を使って考えることができる場、相談しながら考えることができる場など、児童が自分に合った解決方法を選択して考えることができるように場の設定を工夫した。 ※ A児が友達と相談したり、ノートに考えを書いていたりしたら、目を合わせて頷き、そのまま進めて大丈夫だということを伝えた。
説明しよう	集団解決の場面において、教師は児童の考えを聞くことに専念し、児童の考えが全体へと伝わるよう、児童と児童の言葉をつなぐことに専念した。また、児童が説明した内容の中で、まとめにつながる発言においては、積極的に板書した。児童一人一人の説明が、たし算されることによって、問題が解決できるよう、解決までの道のりは、黒板や電子黒板で視覚化できるようにした。 ※ A児が挙手していたら、積極的に発言させた。その発言内容が解答として不十分だった場合は、必ずその他の児童に発言させたり、その考えをつなげたりして、A児の考えを生かすようにした。
まとめをつくらう	子どもたちと一緒にまとめを考え、子どもたちの言葉を使ってまとめるようにした。
確認しよう	本時の学習到達度を確認するため、数値等を変更した適用問題を作成し、時間内に全員が解答できることを目標に実施した。 ※ 原則、A児が自力でできるまで待った。適用問題は黒板やノートを見れば必ず解けるようなものにした。それでも手が動かなかった場合は、どこで悩んでいるのか個別に声をかけるようにした。できたら花丸をし、自分の力でやりきったことを積極的に価値づけた。
振り返らう	振り返りシートに、毎時間、「わかったこと」、「自分で考えたこと」、「発見したこと」などを記述し、単元を通して確認できるようにすることで、自らの学びを自覚できるようにした。
(残りの時間)	振り返りシートを記述した児童は、タブレットを活用し、自分の苦手な問題に取り組んだり、問題を作って友達と解き合ったりするなど、自らの学びを進められるようにした。

※は、学習の進みにくい児童 A 児（標準学力調査の正答率 18.8%）への手だて

めあてをつくろう 説明しよう

単元の見通しをもとう まとめをつくろう




1時間の流れが分かるような板書

考えよう

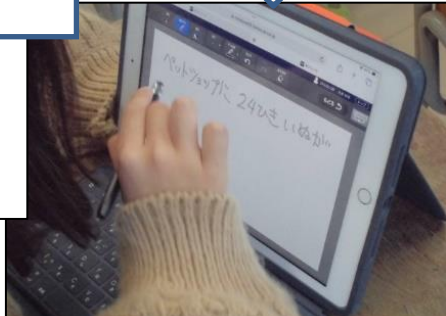
確認しよう

振り返ろう、(残りの時間)



かくにんプリント () ←
○ わからない数を□として図に表して、答えをもとめましょう。←
1 肉まんを何か売っています。10こ売れたので、のこりが13こになりました。←
←
←
←
はじめにあった肉まんの数を□として、場面を式に表しましょう。←
式：←
□にあてはまる数は… () ←

学習到達度を確認するための適用問題



自分に合った方法を選択して考えている。

振り返り後、
タブレットを活用し自分で学びを進める。

2 補充学習について

- 毎日、大休憩後の5分間に「ドリルタイム」という補充学習の時間を日課表に位置付けて実施した。学習内容は、算数科に特化し、児童一人一人の課題に応じた内容のドリルパークや学びなおしドリルをさせることで、つまづきを克服させるとともに、基礎学力の定着を目指した。

※ 学習の進みにくい児童 A 児（標準学力調査の正答率 18.8%）の様子

「ドリルタイム」では、現在学習している単元の学習内容を中心に取り組んだ。また、A 児は友達と一緒に行動することが多く、休憩時間は友達と一緒に算数教室に来て、自分から基礎問題プリントを選んで学習する様子も見られた。

3 校内の研究体制について

- 今年度は、全学年1回ずつ公開研究授業を行う計画を立てた。学年で教材研究や授業の話をする学年会の時間を週1回程度設けた。また、授業公開の1か月前から研究推進リーダーが各学年に加わって一緒に単元計画を立てたり、授業づくりや指導案検討を行ったりした。
- 教員間で意識統一をするため、研究部が中心となり、定期的に研修日を設けて、ICT活用の具体例を共有したり、各学年の取組を確認したりした。
- 年度初めに、研究推進リーダーが今年度の研究や授業スタイルを意識した授業を行い、校内で自由に参観できる時間を設定して、今年度の取組の方向性を共有した。
- 授業後は協議会を設定し、異なる学年間で協議ができるような場の設定を行った。その後、授業や協議会で得た学びや気づきを、自分の授業につなぐことができるように振り返りシートに記入し、そのシートを掲示するなどして教員間で共有できるようにした。また、研修部長が研修だよりを発行して授業の工夫などを広めた。

4 検証結果

令和5年度標準学力調査 5月

	算数		
	平均正答率		正答率30%未満児童の割合
	目標値	自校	自校
3年	73.9	69.9	6.8

-4.0

令和5年度標準学力調査 12月

	算数		
	平均正答率		正答率30%未満児童の割合
	目標値	自校	自校
3年	68.4	65.0	6.8

-3.4

12月に第3学年を対象に実施した標準学力調査(算数科)において、平均正答率は目標値を下回っているものの、5月調査と比較すると、0.6ポイント目標値に近づいた。正答率30%未満の児童の割合については、変化は見られなかった。

令和5年度標準学力調査 5月

	基礎	活用
	目標値	78.6
自校	76.9	44.9

-1.7

-12.2

令和5年度標準学力調査 12月

	基礎	活用
	目標値	76.6
自校	71.9	54.8

-4.7

-1.7

問題別にみていくと、活用問題の正答率は目標値と12.2ポイントの差があったが、1.7ポイントに縮まった。しかし、基礎の問題では、1.7ポイントから4.7ポイントに差が広がった。

全校児童を対象とした児童質問紙調査【7月・12月】

算数の授業の内容はよくわかりますか	肯定的回答(%)						
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全体
7月	91	80	90	89	75	67	82.0
12月	97	84	99	84	84	71	86.5

7月と12月に全校児童を対象に実施した児童質問紙調査において、昨年度は、加配教員が算数専科で一年間学習指導を行った第3学年のみ、上昇傾向が見られる結果だったが、上記の結果から、今年度は一部の学年だけでなく、複数の学年において、「算数の授業がよくわかる」と肯定的に回答した児童が増え、学校全体で上昇傾向が見られた。

※ 学習の進みにくい児童A児(標準学力調査の正答率18.8%)の変容

12月調査では、正答率が34.4%となり、無回答数も20問から8問に減少した。5月の児童質問紙においては「算数の勉強が好きではない」「分からない」と回答していたが、12月調査では「算数の勉強が好きになった」「分かる」と回答しており、その理由として「単元計画で今日何を勉強するかがわかるから」「確認プリントで今日の勉強ができたかどうか分かるから」「毎時間学習の流れが同じだから」「タブレットを使うから」と回答していた。

教員を対象に実施した質問紙調査【12月】

質問項目と主な意見	肯定的回答(%)
今年度、研究指定を受けたことで、校内の研究推進が図られたと思いますか。 ・子ども達に何を学ばせたいか、どのように学ばせたいのかを考えることができた。 ・全ての学年が授業研究をすることで、みんなが意識統一して取り組めた。	100
今年度、研究指定を受けたことで、自分の授業改善が図られましたか。 ・八幡の取組を研修のたびに紹介されることで、改めて自分自身も確認できた。	100

12月に教員を対象に実施した質問紙調査において、昨年度は、一部の教員のみが自分の授業改善が図られたと感じていたが、上記の結果から、今年度は、すべての教員が自分の研究推進が図られたと感じていた。

5 研究成果と課題

- 児童が授業をわかると感じるようになった要因
- ・ 一つ目は、1時間のねらいを明確にして単元計画を立てたことである。単元計画を児童と共有することで、「次はきつとこんな問題が出るよ」「もうすぐテストだからノート見返しておこう」「この単元ではこれが分かるようになるんだな」等、児童が本時や単元の見通しをもったり、既習事項を振り返ったりしたことが、自分の学習状況を自覚することにつながった。また、教員側は、ゴールから考えたことで、児童に身に付けさせたい力が明確になり、授業中に児童からどのような意見が出て、児童の思考に寄り添うことができたことが、児童の授業が分かるにつながったと考える。
 - ・ 二つ目は、同じ授業スタイルを継続したことである。毎時間、授業を同じ流れで見通しをもたせながら進めることで、学習に抵抗感のある児童も安心して取り組むことができた(A児)。また、毎時間確認プリント等で適用問題を行い、時間内に全員が解き終えることで、児童は「今日の勉強はよく分かった」「自分はできた」という実感をもつことができた。成功体験を積み重ねることが自信につながり、最後まであきらめずに問題に向き合うことにつながった。
- 教員が授業改善を図られたと感じるようになった要因
- ・ 全学年が授業公開を行ったことで、全ての学年が授業改善に向けて自分事として取組を進めることができた。また、単元計画を立てたり教材研究をしたりする中で、昨年度より、学年を越えて話し合う機会も増え、日々の生活の中で、教員同士が授業の話をする時間が増加したことも、教員の授業改善に対する意識向上につながったと考える。
- 学力の定着に課題が残った要因
- ・ 12月に実施した標準学力調査を分析すると、活用問題より基礎の問題に課題が見られた。具体的には、3けたの足し算や引き算の計算、あまりのある割り算の計算、掛け算の筆算などのいわゆる四則計算や、時間や長さについて適切な単位を選択する問題など、基礎的な知識・技能に係る問題の正答率が、他の問題に比べて低かったのである。上記に示しているように、授業では、毎時間確認プリント等で適用問題を行い、時間内に全員が取り終えるように取り組んでいるため、教師も児童も一度はできたことを確認している。そのため、数学的な見方・考え方をどう働かせればよいのかについては、授業の中で習得していることが考えられる。しかしながら、基礎的な問題に限って正答率が低いということは、計算練習の量や、数えたり調べたりするという数学的活動の経験が少ない児童が、教師が想像しているよりはるかに多いのではないかと考える。
- 昨年度に引き続き、今年度も、かけ算九九については、完全に習得できていない児童を把握し、その児童がかけ算九九を習得するまで何か月も追いかけて習得できるようにしてきた。その結果、12月の標準学力調査の割り算の計算問題は、正答率が9割程度であった。しかし、あまりのある割り算の計算や3けたの足し算や引き算、掛け算の筆算になると、正答率が6割程度に落ちているため、掛け算九九だけに限らず、その他の学習内容についても、誰がどの程度まで定着しているかを十分確認する必要があることが分かった。計算を間違える要因は、児童一人一人異なるが、計算のしくみが理解できていない児童だけでなく、筆算を書く過程で位がずれたり、問題を写し間違えたりしている児童も見られる。
- そこで、今後は、補充学習の取り組み方法を再度校内で検討する。また、授業等の場面で、問題の間違いを修正する際は、正しい答えを求めることだけに重点を置くのではなく、何が原因で間違えたのかを児童と一緒に共有する場を設定するよう、日々の教育活動の中で積極的に取り組んでいきたいと考えている。